



歴史研究と図像資料のデジタル化

孫 安石（事業推進担当者 / 神奈川大学大学院・助教授）

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究テーマの一つに「文化情報発信の新しい技術の開発」という項目がある。その具体的な内容は、非文字資料の体系化と情報の発信、そして、技術の開発をめぐる非文字資料のデータベース化とデジタル化を検討し、新たな方法論を提示することであり、その理論枠を検討するために2005年4月28日「歴史研究における図像資料のデジタル化」をテーマにしたワークショップが開かれた（<http://www.kanagawa-u.ac.jp/06/kouenkai/050414/index.html>）。

今回はとくにアジア（東南アジア、中国、日本）と関連の深い分野で歴史資料のデジタル化に関わってきた専門家に報告をお願いし、今後の神奈川大学COEプログラムのための活発な意見交換を行なうことができた。以下、そのワークショップの報告をまとめながら、歴史研究と非文字資料に関連する最新の情報などについて触れておきたい。

1 ワorkshopでの報告

柴山守氏（京都大学東南アジア研究所）の報告は今までのコンピュータや情報技術を歴史、地域研究に如何に応用するかについて触れたうえ、事例として最近の地理情報システム（GIS:Geographical Information Systems）により近世日本と東南アジア諸国間の交易がどのように可視化されるのかについて紹介するものであった。¹

具体的には、タイ国のアユタヤ、スコタイ遺跡及びアンコールから東北タイを経由してスコタイに至る仏教文化の伝播をGISなどの技術を用いて復元する過程の説明がなされた。また、大阪を描いた元禄、天保時代の地図と現在の地図、そして、航空写真を重ね合わせて3次元で再現した上、琉球、ベトナムの史料を加え、12～19世紀にいたるまでの貿易ルートと文化伝播の動きを可視化する研究について紹介された。

また、手書き文字OCR技術を応用した古文書翻刻支援システムの開発は、文字認識の範囲を近世江戸時代の古

文書や現代のくずし字の読み取りにまで進んでいる旨の報告があった。従来の歴史学において豊富な研究成果の蓄積がある文字資料のデジタル化は、図像資料の体系化を目指す本学のCOEプログラムとも密接な関連があり、多くの参加者の興味を引いた。

小野守氏（コンテンツ株式会社）の報告は、歴史資料をデジタル化する際データの解像度、色深度（ビット深度）資料撮影の技術、画像処理技術の相互性が重要であることを指摘した上、宮城県図書館が所蔵するマテオ・リッチ撰「坤輿万国地全図」のデジタル化および隠岐・海士町の島全体の情報をデジタル化する過程を紹介するものであった。ZOOMERなどのソフトを用い超高精細画像データを質感や風合いまで自然な状態で再現する技術は、今後、博物館や美術館などに大きく活用されて行くことが期待される。

このようなデジタル技術によって多くの図像資料が細密に復元され、一般の人々が閲覧できるようになれば、歴史学の研究が古色蒼然たるものではなく、地域創生という現代的意味をも合わせもつ可能性があることを示唆するものであった。²

貴志俊彦氏（島根県立大学）は「北東アジア地域研究のための資料・書誌情報データベース」の国際的な拠点をウェブ上で形成する計画を進めており、すでに上海租界工部局警務処文書、北京特別市市政公報、天津史文献目録、スタンフォード大学フーヴァー研究所中国関係アーカイブ、モンゴル人民共和国科学アカデミー刊行人文社会系学術定期刊行物記事索引などをインターネット上で公開している。本ワークショップでは、このうち戦前、日本で発行された膨大な数の絵葉書のなかで、東アジア近現代の風景、人物、出来事などを映し出す約2000点余りの絵葉書を画像データベースとして構築する試みが紹介された。とくに、貴志報告では絵葉書だけではなく、ポスター、広告、商標、画報、写真、地図、映画などのグラフィズム全般に関する研究動向が紹介され、中国、台湾、韓国における絵葉書資料の所蔵状況についても触

られた。また、このような絵葉書の画像データの利用は従来の歴史研究では分析することができなかった様々な可能性を広げることも指摘された。³

筆者の報告は現在、画像データベースを作成中である『支那事変画報』と『写真週報』などの資料を紹介しながら、これらの画報のなかに含まれた租界関連の情報を蓄積して行く計画について触れたものであった。また、近現代史に関連する図像資料、例えば、新聞や雑誌などに掲載された写真を取り扱うとき、その他の時代とは異なり、読者は一部分の図像のみを記憶するのではなく、ページ全体が一つのイメージとして記憶されることについて言及した。近現代史の場合、人々は図像と文字が融合された新聞と雑誌のページ全体を一つの情報として記憶し、それが時代の記憶として再生産されるからである。

2 図像資料のデジタル化に向けた課題

以上、ワークショップでの報告内容を簡単に紹介した。これらの報告では、(1) 歴史資料をデジタル化する過程で一つの基準を設けることが重要であること、(2) 歴史・文化研究とデジタル化を融合させるためには狭い学際領域をのり超えた共同研究が必要であること、(3) デジタル資料の活用面では、これらの研究成果が一部の大学や研究機関の内部だけで利用されるのではなく、広く社会一般のための教育プログラムとして活用されるべく、新たな体制を作っていく必要があることなどがこもごも指摘された。

今回のワークショップが終わった後、ECAI (Electronic Cultural Atlas Initiative) Shanghai Conference (上海、復旦大学、2005年5月9日～13日)の「History and Visual Documents panel」に参加する機会を得た。⁴

ECAI会議はGIS技術を駆使した世界の歴史地理学研究成果と問題点を検討することを内容とし、今年の上海会議ではとくに中国史に関する地理情報のデータベース化作業について紹介があった。ハーバード大学のイェンチン研究所が進めている中国の仏教遺跡に関するデータベースと上海の復旦大学が推進する中国の歴代の河川の変貌を追跡する地理情報の集積状況の報告の他に、中国の古典経典(儒教・仏教など)をデジタル資料化する作業や言語の勢力範囲の変化を地図上に表す試みなどが報告された。

また、このECAI上海会議では歴史資料のデジタル化に向けた韓国側の取り組みが極めて活発であることを確認することができた。すなわち、欧米と日本などの場合、大

学と研究所のスタッフがECAIの会議に参加しているのとは対照的に、韓国からは大学以外にも、政府の文化観光政策を担当する関連部署から人が派遣され、自国の文化遺産に関するデータベース作業の進捗具合が報告された。

ところが、そのほかの関連報告で筆者の関心を引いたのは、Urban GIS Projectsという取り組みであった。このプロジェクトによって、ロンドンと上海、そして、東京など世界の各都市をテーマにした地理情報や図像資料の蓄積が急速に進んでいることを確認することができた。さらに、印象に残ったのは、ECAI会議でも狭い学際領域の範囲をのり超えた異分野間の交流によって新たな可能性が生まれるという考え方が繰り返し、強調されたことであった。

神奈川大学21世紀COEプログラムは2005年11月に国際シンポジウム「非文字資料とはなにか 人類文化の記憶と記録」を開催する予定であると聞く。そこで提示される新たな試みは、果たしてどのような歴史研究の可能性を示してくれるか、期待したい。



ワークショップ(2005.4.28開催)の様子。



2005年ECAI上海会議の案内(ホームページ 4より)

詳細については、以下のホームページを参照。

1: <http://gissv.cseas.kyoto-u.ac.jp/~sibayama/index.html>

2: <http://www.contents-jp.com>

3: <http://gdb.u-shimane.ac.jp/neardb/top.html>

4: <http://ecai.org/Activities/shanghai2005/panel5.html>